

翻刻「川めぐり日記」(下)

Kawameguri nikki

板 坂 耀 子

(Yoko Itasaka)

(第一部 国際共生教育講座)
(平成十四年九月二日受理)

(18) 静御前の古跡

扱みちのく路は今の、もとくりはしより、川妻村、大山村、前林村より中田宿にかかりて今の陸奥路へ通りたるにや、源義経陸奥にくだりける頃、思ひ人なりける静女かしこにしたひ行とて、この道にかかりけむとおぼしくて、「前林村に静が結びし柳有」といひ、また傍に「静返し」といふところ、ちいさき橋有。所の人「しあん橋」といふ。こは「義つね高館にて、むなしくなりぬ」とききて、「さらば故郷にやかへらん、ここにて尼法師にやならん」と思ひわづらひしが、つるにもとの道にかへりしとぞ。「夫より今の栗はしのわきなる高柳寺をたのみて、尼にならんとしけるに、病おもく伊坂村にてむなしくなりにける」となん云伝へて、今「伊坂の一本杉」とていと大なる杉のたちたるは、「かの塚のしるしになんある」といふ。しかるに、よつづきてさはがしく、水も治らでほしいままに流溢れつつ、川の筋もささまにみだれて、かの羽生

領そとのむらのほとりより、北さまにほれ流て、それよりまた南に流、渡良瀬川に入て今の古河川辺領と向川辺領との中を流てもとの利根川に落合、ちやり川村のあたりは水ひたりしを、寛永の頃より水を治させ給ふこと、もはらはじまりて、天和元年に至り古川河辺と向河辺の中を堀ひろげて、今の権現堂川に通し、又、中田宿と川妻村の中をあらたに堀割□□□わけ、関宿の城の北へ通して利根川の末にあふ。これを赤堀川といひ、その城のうしろにて落合ぬる、とね川の末を逆川といひ、此ふたつ一ツになりて下とね川と云て香取の浦へ流る也けり。また今の栗橋伊坂村と中新井村の中を東に流て利根川へ落る小川あり。是もそのかみ利根川の溢流て、をのづから堀たる川にかあらむ。今栗橋に居たる関の名を「房川の渡」、「中田の関」としもいへば、そのころ迄は「房川」と云も有けん。いづくなりやしられず。今、此小川を隔て南のかたを嶋中川辺と云、北を向川辺と云、埼玉郡にしてみな武蔵のうち也。又わたら瀬川の落合より下、東のかたは下総国葛飾郡にて、むかしはこも川辺

といふ名の有しとおぼえて、かの前林村のならびに、水うみむらといふ有。その三嶋明神の鰐口に、「下総国下川辺野方庄郡山郷」とえりて有。これに「文龜三癸亥年八月」と有ば、其頃迄は下川辺と云しとおぼゆ。□□はむかしは渡良瀬川の西は武蔵にて川辺と云、東は下総にて下川辺と云しを、今は武蔵のかたはさまぎまに川の筋わかれて嶋の如く成たるを島中川辺と云、その向なれば向川辺といひ、また其向ひは古河に近ければ古河川辺とさへいひならはして、下総のかたには川辺と云名はしるべくもなくにけり。かかれは何事もむかしのままにはあらずなりもて行。ただのこれるは名のみ也と思へば、又それだにうしなへることの多かりなど、世の中のたのみなきことも、さまさま思ひなげかれて、

淵は瀬にかはり行世をあちきなく川辺のあしのねぞながれる

風すこしよはりけれど、猶やまず。「けふは思ひ川のわたりまで」ところざしけれど、目もあかれねば中田の宿にとまりぬ。

爰に光りやう寺てふ寺有。むかしは高柳寺と云て、かの伊坂村のほとりに有しが後にここにうつりて、その頃より真言宗をあらためて浄土新宗になり、寺の文字もかきかへしとぞ。はじめは光龍寺と書たらんを、又龍を了にかき替たるが、いかなるゆへにかありけん、しられず。これぞ静女が尼にならんとて行たる寺なれば、「かたみの舞衣、小刀など有」とききて、いださせてみるに舞衣てふものは、此世にたぐひなきものにぞ有ける。地は紺とみゆるに色々のからの糸もて雲を縫て、その中に鶴のごとき鳥の舞形有。そのぬひかた、えもいはれず、いみじうみだれて衣の姿もわかねど、背とおぼしき所に雲の中より壺をふせたらんやうにみゆるもの出たり。その右左に月日の形有。いかにもただ人の、きならすべきものにもあらず。伝へいへらく、「神泉苑にて雨乞ありしとき、静女舞姫にたちたりしが、雨ふりにければ、御さんじきより下したまは

るところなり」とて、いとかしこみて、はれの舞にはかならず是をきけるとなん。げにさることにもや有けん、いとたうとき衣にて有ける。

(19) 笠造りの村

中田新田てふ所より渡良瀬川にそひて行ば忍戸むらてふところにて、思ひ川落合、みなかみは下野国都賀郡なる鹿沼川小倉川などいふ谷川、ひとつに流れ来て川路凡十一里ほど有と云。渡はせまけれど、水増るときは忽あふれて、その勢ひふせぎがたしとぞ。

おほかたの渡りをばせし川の名の思ひや増るそでのぬると

此川にそひて登れば、古河の城の後にいたる。爰より西にあたりて下野なる恵下村てふところにて、うつま川と云みづ落合。こは都賀郡なる□□木と云ところより流来る小川なり。櫓の木むら、なまるむらなどいふあたりは寒川郡また都賀郡もまじりたり。乙女むらてふところの村おさが家にしばしいこふ。梅の老木二もと有て、花ざかり也。

風かなふ乙女のさとの梅が香をわがころも手にしばしとどめん

また渡良瀬川にいでてみるに、伊賀袋と云ところに堤にそひて庵あり。「水月庵」と云額のみゆれば、竹のあみ戸引あけて立よれば、あるじの法師いでむかへて、何くれとたちまふ。まつども年ふりたるが立めぐりて、下は川みづ清く流たり。木の間よりみわたせば、南のかたは古川河辺領のわたりうちひらきて、帆かけたる船ども行かふ。西のかたは富士の高根そびえて、武蔵上野なる山々は、その禁のやうにみゆ。東のかたは、まつのみら立たる岡、西南にさし出たり。「此かげより出来し月の夜もすがら水にうかびて、富士のあなたに入らん暁、鹿の鳴たらんなど、いか斗あはれふかう、をのづから心のちりな□、苔の袂の露のみはらひ

ぬべきにや」と思ひやらる。

心すむ月とみづとの友鏡後の世までやかけてみるらん

心のみとどまりて出行ば、下宮と云所にいたる。堤のうち田畑とおぼしき所まで、みな芦深くしげりて、家ちかき所には眞菅多く植たり。『田はたつくらむよりも、此ふた艸社(こそ)なりはひによけれ』とて、芦のあじろ組、すげの笠縫て、市にも出て商也』といふ。家ごとに土もてぬりこめたる、むろといふものをまうけつ、そのうちに入て笠をぬふ也。こは、「菅かはかずして、ぬひよからんため也」とぞ。所ならひとはいへど、田畑のもののかずをすてて、かかる世わたりする社(こそ)いとにくきわざなれ。されどまた世の中のたすけにならぬしな□しもなければ、さてもありなにか。

しげくたつあしの下宮いかなれば水田をばぬはで笠を縫らん

とてわらふ。海老瀬村と云ところより上野国邑楽郡館林領といふ。相の川、矢田川などいふ小川の埋りたるを見ありく。けふも風いみじう吹て寒し。雲は立おほふやうにすれど、とにかくに雨はえふらで、風のみふくこそわびしけれ。

風あらく霞みだれて立雲の黒髪やまに雪やふるらん

(20) 文福茶釜の寺

青柳村と云ところに茂林寺とて名高き寺有。守鶴と云し僧有て、此寺ひらけし時より代々の和尚に随ひつつ寺のことどもとりおさめ居けるが、そのよはひのほど、またいづくにて生しと云事もしる人なかりしとぞ。ある時ごうこ(「ごうこえ」の略。江湖会。禅宗で僧侶を集めて行う夏期の修行の行事)有て国々より僧あまたつどひしとき、いづこより

か茶釜ひと口たづさへきて茶をたつるに、その釜の湯つくることなければ、人々あやしみ思ひるけるに、かの僧そぞろに眠りるけるを、ものかげよりみれば、狸のかたちなりければ、うちおどろかれてささめきあへりしかば、ねむりさめていふやう、「我は人間にまじるべきものにもあらざりしが、この御寺ひらかせ給ひし大とこそをしたひまひらせて、しばし爰にやすらひしが、はや和尚も四継になむならせ給ふ。今あやまりて、わがかたちをみえまいらせしうへは、猶あるべきにもあらず。いづかたへもまかりなん。年頃なれまいらせて、よろづめぐみうけ侍りしむくひは言葉にものべがたし。はた志をみせまいらすべき品もなければ、此世にてあひがたきたうとき事、また目ざましき事ども、まのあたりみせまいらせん。夫をわがかたみとおぼし出よ」とて、やがて釈迦牟尼説法のところ、また八嶋、だんの浦の戦ひのところ、その時に有て其にはにいたれるがごとくみえて、たちまち夢のさめたるごとく、きえうせければ、かの僧もいづち行けん、しらずなりにけりといひ伝侍ると云。「さらば、その釜みばや」といへば、「やむごとなきかたより見たまふべきよし仰有て、たづさへ行たれば爰になし」とて、みずなりにき。仏を置まいらす所はいふもさらに、堂宇みな唐めきて造りたるに、ふるき梅桜まつなどぞ、軒近くたてり。梅はいま盛りなるに、木のもとに大なるかねの仏おはするにむかひ奉りて、しばし花を見つつ、

手向だに折ばうしとやあかでのみみよの仏も花をもるらん

とおぼゆ。蛇川、柏川など云小川を見めぐりて、また利根川の上にいる。かのながらの社をみやりて、いにし年の神無月をおもひ出て、

春の日のながらの社をみやりて、いにし年の神無月をおもひ出て、引かへて春とふゆとにみしめ縄同じながらの社もめづらし

花のさかせまほしうおもへど、山はいまだ雪のこりてみゆれば、花の

ひも、とけかぬるなるべし。

夕日影さすや赤城のやま高み猶きえがてにのこるしら雪

南にわたりて川にそひて西ぎまにのぼり行ば、五料の関にいたる。「とね川の船の行かひは爰より上にはなく、筏のくだるのみなり」と云。こよひは関の下なる沼の上と云ところに宿りぬ。更行ば雨ふり出たり。あなうれし、艸木のためにいか斗よからん、いたくもふりねかし。

ふく風もしづかなる夜の春雨はもるものどけき関屋なるらし

(21) 新田の城跡

十三日は、暁より雨をやみなくふれば出ず。書ことのたまりたるを書などして暮ぬ。あくる日は雲も残なくはれわたりて、麦の苗も畔の小艸もみどり増りてなごりの露に日かけかがやきわたるに、色々の金まきたらんやうに菜の花の咲出たるは、いはぬ色なる枝も、さのみはをとりまじうなん。

風ふかばみだれて色もあせぬべしあな心なの花の朝つゆ

ほそき道の行ずりも心ぐるしう、堤のうへにいづれば、此川はからす川と云。水上は信濃なるうすひの山、鳥口といふ所より流出、みとの郡なる阿久津と云所にて蕪川てふ水に落合、また夫より下にて神流川もひとつに流入て、佐位郡なる嶋むらと云所にて、利根川に入、川路凡拾五里斗有といふ。渡りは六百間斗もあらむ。滝津瀬なれば、上のかたへは船通ひがたし。下のかた、とね川なる八斗嶋てふところにわたるとて舟を出せば、目もまひつ、矢よりもとかるべし。前河原嶋村などいふところを見めぐ。土筆のいとおほくみゆれば、ふるさとの人のもとにとて、

筆つ花いざ手につみて若艸の露の玉章書送りてん

すみれの咲たるをそへて、

へだつともいかでわすれん妹とわがすみれ花さく宿のかきねは

と云やる。爰より北にむきて行ば、新田郡太田と云所にいたりぬ。いにし年もここに来けれど、新田山にのぼらずして、過ぬ。此やまは新田家の城のあとなれば、「けふこそはのぼりてみん」とて太田のうしろなる大光院てふ寺のわきより登る。いとさかしき道なり。「追手のかたは西へなだれてのぼりやすし」と云。是より東北へ山三つ重りて其間々々に、からぼり、石垣などのこりたるも有。本丸とおぼしき所は東北の隅にて、ことに高し。後は岩かど、壁をぬりたらんがごとく立て、ししだにかよひがたく、東南へつらなりてすこしひくきかたや、からめ手なるらむ。本丸のもとに池ふたつ有。「いかなるひでりにも、みづたゆることなし」といふ。そのかたはらなる土をうがてば、焼たる米、今にあり。又其南の谷に梅多く咲たり。是もそのかみのたねの残りたるにや有けむ。

ありし世の種かあらぬかしら雪の残しあとの谷の梅がえ

いたづらに春や経ぬらん谷ふかみ人もすさめぬはなの埋木

「鶯のふる巢はここにや」とおもはるるに、声だにせず。松かせのみひびきあひて苔のむしろむなしくしきたり。ふもとなる大光院は「義重朝臣のひらきたまひし」とて義重山と云。塚のしるしの石の塔有。「大光禅定門」と云謚によりて、今、寺の名によぶなりとぞ。また後に金龍寺とてちいさき寺あり。「新田家陣中の幕、獅子の紋つきたるが有」とぞ。

(22) 赤堀川開鑿の成功を確認

十六日と云に、新田山をうち越て渡瀬川の上のかたを見ありく。例の

風いみじう吹いでたり。

新田山けさ越くればかち人の渡らせ川に春風ぞふく

「まち堰矢羽堰などいふ田の養水せきいるところを見ん」とて、丸山などいふちいさき山々をうち越て行に、かぜはしきりに吹つのでやまず。かく日毎に風にのみなやまさるこそくるしけれ。

曇る日もてる日もたえず玉かつくるしくしほるやまのあらしか

十八日は、下つけにうつりて足利郡梁田郡のうちを過て、野田といふところより矢羽川を渡る。是ぞ下野上野のさかひにて、わたりつきぬれば上野国邑楽郡也。矢羽川をわたりて行は「梓弓春の日影もはや入にけり」とて、こよひは大嶋むらてふ所に宿る。爰は堀としまさがしるよしなれば、何かのことどもとひきく。暁がたに雨の音の聞えて、夢のここちに、「あなうれし、いつのままにか有けん、かぜなくてふらば、なかなか道のほどもなぐさみぬべし」など思ひて目さめて戸をし明みれば、くもたえだえに残る月の影ほそうさして、山とどころうすうみえわたりたるに、木々のしづくひやびやかにこぼれたり。

雨の音に寝ざめてみれば月ぞもる雲も心や有明のそら

ながめあるに日出ぬとて、例のあはただしう、たちさはがれて出ぬ。けふも川にそひて行。霞深く立込たるところどころに雁の四つ五つ行をみて、

咲はなに心やかかけし春霞立をくれける雁のひとつら

と、おもはるるに、ただひとつはなれたるや、妻なし鳥ならむ。

いづくにか霞のころも立別れ妻なきかりのなきわたるらむ

「数はたらでぞ」といひしも、げに哀なり。是より武蔵にうつりて古河川辺領よりまた栗橋の関の下、中田のわたりをつくりはてたるさまを、みありく。かの赤堀川の口ものこりなくことなりて見めぐるに、はやこ

なたへ水すすみて栗はしの下つかたの、さしも深く水の勢いあたりがたかりし所は浅くなりつつ川妻の水わけ杭にあたりて、此ところ、いと深うなりて、前にありける洲はかけ(欠け)流つつ、みを(水脈)になりて、権現堂川のかたへ、なかばばかりや流るめり。赤堀川のかたは浅かりし所々、大かた深うなりて、しも利根川のかたへ水先よくすすみぬれば、川中に有つる洲どもおほくかけ流たり。兼てより深く思ひはかりにしことなれど、かうしも(こうまでも)思ふ儘に、ことのなりぬる嬉しき、涙さへこぼれて、

なげかずよ川瀬にたてるみをつくし思ひしことのしるしあるかは

彼(かの)水神の社にまうでてみれば、花の木どもおほく植たり。こは、かく水のおさまりぬべく、そのわざはひをのがるべきことなりける、うれしさも、かしこき(ありがたさ)もとりあつめて、ただこのおまへに花の木ども、ほりもてきてうふる也けり。今は御しめのうちに植あまりて、「はや、かなはじ」(もう植えてはいけない)と(役人は)せひ(制)すれど、いづくよりか夜のうちなど根こし来つつ、みしめ(注連縄)のそとに置たるもあり。

いかばかり神もうれしとみしめ縄長き日あかぬ花のはやしは

あるはそのことわりをあげて、はひかひ(俳諧)のほく(発句)など書たるを石にえりて立たるも有けり。

(23) 花の便り

廿二日は、逆川、権現堂川、みなすり(修理)したるやうを見ありきて、埼玉の郡おし川に至る。きのふ、をとつ日は風いみじう吹て寒かりしに、けふはいと長閑にて薄曇りたり。「雨も哉、今年はいかなれば風

のみ荒ふふひて雨のふらざるらむ。『春のものとて』といひしは、空にはおぼえざりけん」とてわらふ。長野と云ところ、桜多く立ならびて咲たり。

山鳥のおのへの雪のあとよりや長野にとくる花の下ひも

たがためとか、誰がうへにけん、いとたたまくをしき下陰なれど、先もいそがれて、「またいかなる花かあらん」とて行。つつみむらと云所に湯有。出湯にはあらで、ちかた明神てふ神のみたらしをくみて、湯にたきてあぶるに、おほかた病いゆとぞ。「夏のほどは人おほくつどひ来てにぎはし」といふ。「そもいかなる神をいはひつる社にか。『父方』と云しひとの霊をや祭けん」など思ひて、さまざまにとへど、わきがたし。もとより、はふりも、みやつこもなければ、またしるべもなし。本川俣と云ところより利根川の堤を行。そと野と云所に桃の花の赤きしろきにとどこどころ桜もまじりて咲つづきたる、菜のはなさへ匂ひあひて夕霞の立こめたるさま、何くれの石木とりあつめて、きよらに造りなしたる庭よりも、なかなか心行春の色なりけり。

花盛りもさく里の春霞色の千種にみえわたるらし

此ころ行きさきさきみな、すり（修理）いできて見あらたむることのいそがるれば、下司のひとびとを、そこそこわかちてみするに、光のりは、かの大山桜に近きわたりを行は、「名だたる花を折折もあれ、咲出たる頃に見ずてやみなんは、いと口をし。一ふさをだにとりておこせ」といひやりたりける。「いまだ咲出す花の下紐も君ならではとかじ」など、たはぶれて、つばみたる枝を人にたぐへておこせたりければ、

名もたかき大山桜咲出ぬや人のこころの花に恥けん

といひやる。

(24) 宗任明神

廿六日は、きぬ川のかたへといそぎて、下総にうつる。豊田郡太田むらてふところを過るに、堀をめぐらしたる高きところ見ゆ。「城の跡にや」と問へば、「さなり。むかし此国下妻と云所の多賀谷太掾ときこえし人の捕手の跡にて今に東門など云所侍り。そこに大なる塚ふたつならびたるを、太鼓塚と云伝侍る。其故はしり侍らず」と答ふ。きぬ川にへたる若宮戸村と云ところに、かの多賀谷某が豊田四郎某を攻しとき、城かたく、落ざりければ、きぬ川の水を此ところにてせきとめ、東の方なる堤をきりて水責にしけるとなむ、云伝へ侍ると云。そこより東のかたへとどこどころくぼみてみゆるは、水流てはれけるあとと云。四郎某は小貝川の西なるところに住しとぞ。去年の冬豊田の寺のいにしへをとひしこと、おもひあわせられつ。又、本宗道村てふところはかの四郎が源のよし。家に随ひて安倍の宗任をとりこにしけるが、其たけきさま、はた心広くたくましう、おほかたの人に似ず。「あはれ、もののふのしたふべき人なり」とて、後に神にいはひて、宗任明神とあがめけるとなん。さるに多賀谷責きて、このほとりみな、かたきの中になりにければ、豊田の城のうちにいはひうつしけるとなん。今豊田なる椎木と云所に其社あり。さればそのもとの地を「本宗任」と云しを、いつの頃よりか文字さへ書たがへて「本宗道」とはいひ来れりと云。川の東のはたを下りさまに行に桃桜咲交りて峯にたてれば、みづも匂ひて是もまた色なる波にてありける。

もも桜咲けるすへは紅のうす花ぞめのきぬ川のさと

(25) 貝塚村の桜花

廿八日。「花貝川にいたる」とて猶はりの木などしげりたる中をわけ行に、梢いとしろう「桜にや」と立よりて見ればあらず。「そのそこに白く咲るは」と問へば、「こぶしの花なり」と云。

心せよをちこち人のうちわたす頭のうへにこぶし花咲

「あなおそろし。我をなうちそ(私を打つな)」とてわらひて行。川のはたに出れば、いと古き楓の木あり。めぐり、みひろあまりも有。「これは若木にてかたはらに親木あり。三十年ばかりあと(前)までは、なかばはかれざりしが、今はかくこそ」と云をみれば、朽たる木のめぐり、むひろ余りもありつらんとみゆる有。これもかの豊田の城のありし世よりの木にて「多賀谷、この梢を目にかけて、せめよせし」と云。今はところの名にたちて、つきの木村と云。猶行ば霞たな引、山本はるかに花おほくみえたり。「かばかりにほふ山はいまだみざりし。いかなるところにや」と問へば、「貝塚てふところなり」とこたふ。

しら雲のたえ間にみゆる一むらや花さく山のかひ塚の里
はるかに右にみて東に向て行。名残おしうみかへりつつ、

またやみむ片山きのさくら花色のちぐさに霞たな引

晦日の日は此川ものこりなく、みをはりて、下利根川のかたへといそぐ。ふじしろと云所にて、

旅びとも花のときとやいそぐらん弥生にかかるふじしろのさと
爰ぞ天慶の頃戦ありし藤しろ川なるべし。いにし年もおもひて所のひとにたずねしかど、たしかにことふる人もなし。されどまた藤しろ川てふ川もなければ、小貝川の下つかた、此わたりを藤しろ川と云しなるべし。文まき川てふ名のきこゆるもまた小貝川の末なりけり。そのわ

たりは文間領と云。文間明神てふ社も有。又小文間むらなど云所も有。よし有げなれど、しる人なし。布川と云所より船に乗て下利根を下る。かとの浦にいたれば彼明神のもり、何がしの崎など、黒うも青うも水のうへに霞たるに、ところどころ白うみゆるは花にや有けん。

咲にけり霞む浦輪のさくら花あがらぬなみのたつとみるまで

例の風いみじう吹出て水の流にさからへば、浪高く立まさりて船はた
だおなじ所にめぐりて有やうにすすまず。

折しもあれはなの盛に行ふねのまほにもつらきかせ吹ける

「かくならひ(ならいかぜ。冬に山なみにそつて吹く強風)吹つのは、さはらのとまりには子刻ばかりならでは船はてまじうなむおぼえさぶらふ」と、ふな人のいへば立さはぎて「さらば岸のかたによせてひかすべし」とて、村おさして「かうかうなん有」と、さきさきへ云つがすれば、やがてむらぎとに人多く出て引ば、浪をわりて走り行。申の刻過るばかりにや、風たえて浪もしづかになりければ、さはることなく、「はや泊りもみゆ」といへば、みなびあがりてみやるに、いまだ枯ふしたるままの声しげくつづきたる末に棚引けぶりも心ほそう、入日の影うすくなり行ば、「こよひの夢はいかが結ぶ覧」など思ひて、

漕めぐる浦のあし原めもはるに霞とまりの仮寝をぞ思ふ

西のこく過るほどに、さはらにつきて宿りぬ。手をわかつて泊りける人びともみなここにづきて、明る日は爰かしこの事ども、かたみにうちかたらひ、また先々のこと定めあひなどしつづ、弥生三日にはみな爰を立出て定つることくわか行。けふも風はげしう、いと寒し。

たちわたる霞もうすく衣手の香とりの浦に春風ぞふく

浦のみなみのへたを西にむかひて行。桃の酒草のもちなどもいかにしけむ、難まつるわざもみず。

旅にして弥生の三日も故郷の春こそいと思はれにける

竹袋むらてふ所にいたる。小山有て下は利根川ながる。「爰は千葉之竹がとりでの跡なり」と云。此山よりいつる石はみな貝のかたまれるものにて、鉄の槌もてうちわれば玉のごときもの有。貝のみ(身)とおぼしきもの也。山中より貝多く出る所もあれど、かく石になりぬるうへに玉のごとく光有ものさへ出ること、いまだきかず。神代のものなるべきか、世にしらぬもの也けり。

(26) 竹縄を買う

六日にぞ、下利根川も見をはりて、

七日は布佐村といふ所をたちて、かの塩浜にとて行。大森てふ所を過るに山陰の本立しげりたる中に桜の一本咲たり。

ちらぬ間もありて世の中うければや此山かげにひとりさく覧

和泉新田てふ所を過て小金野の牧を行。見たすかぎりみな草野にてところどころ松どもむら立て色々の花どもただ錦きたらんやうにみゆるに、駒はなにげなくうちむれてのどやかなる顔して人の行かたをみやりけるも有。また何事をか心にかけていそぐらむ、うちつれてかけるも有。若きひとは、をひなどする。

小金野の小艸の花をふみしだき霞にかける牧の荒こま

蕨いと多く出たるを手ごとにつむ。「さなせそ。駒のためもいとをし」とて、

車にもつままし物を小金野の駒のすきめぬわらび也せば

「日も暮ぬべし」とていそぎたちて鎌が屋といふより船はしの里にきて舍りぬ。

八日より浦つたひして波よけのすりなりにけるところをみつつ行。日影うららかに、ひがたも遠くなれば海士共は塩たれ衣ほしもあへず、貝ひろひ、もぐさとりなどする。をみなとしも生れながら、つげの小櫛もとらず、をどろをいただきて汐風にもまれ日にこがれて、柿の渋もて染たらんやうにみゆるに、はりめの衣を腰のあたりに引まとひたるこそ哀なれ。綾織物のいろいろにかさね、玉にこがねにとりかざりつつ、猶たらずとさへ思ふめるに、うれたげなる顔もせで、をのがどさへづりわらひ、はしりありくさま、げに世の中はかくこそ有けるものを、我生得しところはおもはで、さらぬことに心をうごかし、及なきことを望み、うらやみなどしつつ、世をも人をもうらみ我身をもなげきなどする社おろかなれ。

生れえし世をなうらみそ浦波もかかるたぐひもひとの外かは

荒和布かり貝ひろひつつかくてしも海士は藻塩のたることやしる

はかなのことや。けふもまた風いと荒くふきしきて花のあらん限りはみなちりぬべし。関が嶋と云所にて、

霞たつ袖師の海の汐かぜに花のなみこす関のしま山

やうやうままの浦にいたりて、かのあらたにつくれる堤をみれば、かねて思ひをきしごとく下司のひとびとも、せちに身をくだきてはからひければ、思ひしよりもよくつくりをはりて、あらたなる垂浜ものをのづからきよらにことなりければ、民どももよろこぶことかぎりなし。思ひはかりしことも、露たがはずことなりにける嬉しさいはんかたなし。

君がため心をよするかひ有て思ひしままの浦かぜぞふく

ここより江戸川を登りて行。花はいまだちりはてず、ところどころにほひたり。東のかたにあたりて「手古那の社もそこ」と歩ききて、よそに過る。

いにしへのままの手古那の袖ならん花のかとめてにほふ霞は

こふの台、栗やくなど云ところをうちこえて行。爰は里見安房守が城跡にて、永祿の頃にや、小田原北条氏のために落されしとぞ。「太刀長刀矢の根など、土のうちより出ることと有」と云。流山てふ所にかかれば、竹を細く割て縄になひて商ふ。「おほかたの竹縄と云者よりはまさりてよき縄なりとて、此川をのぼる舟の綱にはみな是を用」と云。家ごとにうち掛けて商ふ。

世間にあしきはやく流山よきなはたたぬものところきけ

とて、其縄を買て行。爰に光明院とて真言宗の寺にもてる大般若経一軸は、いとふるき世のものにて書写したる人の奥書有。「貞観十三年三月三日酉 上野国前権大目安倍朝臣小水麻呂」と有。世にまれなる経なりけり。前なる竹の林のうちに山吹の咲たるをみて、

みる人をいとひて春や呉竹の世にかくれたる山吹のはな

光のりより、おほやけごとにそへて「下総国なる猿嶋郡のうちを見あるき侍るに、長谷村の香取明神の御前に、二葉なりあひて一葉なる松見侍り。『眠のまつ』とまうし侍る。又若林村に一重八重咲まじりたる桜の侍ればみせ奉る」とて、枝いささか贈りければ、

春の夜のゆめ斗なるころなれば松も眠の名こそしらめ

ひと本にひとへも八重も桜花はなをあまたにみせんとかすると、返りごとのはしに書てやる。

(27) 工事の点検

十一日は岩見村と云にやどる。けふも風いみじうふきて雨さへまじりたれど、をとつひの風よりはよはし。伊勢守は、「はやことをはりて此

七日にかへりつきぬ」といひをこせたり。「むつきのにぞ立いでける」とききに、見めぐる所のひろからねばなるべし。我は猶、ほととぎすさへ艸の枕にきく覧か。申の刻斗より風はやみぬ。雨尚ふりしくにぞ、うち返す小田のますら雄は苗代みづを空にまかせて、蛙さへうれしと思ふらん、声たゆまず。

雨すさぶ山田のみづは渴れども已すみてや蛙なく声

関宿領もと町と云所にて「江戸川も見をはりぬれば、利根川の上のかたへ」とて、

十三日は下野なる野木まま田にかりてまた思ひ川をわたる。

立降りみたびぞ越しおもひ川思ひ遣たる浪の上かは

上野なる館林を過る。小泉村といふ所に、富岡対馬守秀信とか云し人の城跡あり。こは邑楽郡佐野庄二十一郷の主にて、天文永祿の頃あまたたび戦に利有し人なりし。小田原北条氏の為に亡びしとて、龍泉寺てふ寺は富岡氏の建置けるにて、そこに墓のしるしもありと云。佐位郡境町と云所にいたるに、爰にも小柴三郎長光と云し人かまへし跡有。新田家に従てともにほろびたりしとぞ。

十七日に利根川のかみつきたも、のこりなく見終りて武蔵の国埼玉郡にうつるとて、山王堂村と云所より船に乗りて下る。

咲とみし梢の花も落滝津はや瀬さし行春のふな人

雪解に水まさりて、いと流はやく目もまふ斗也。二時斗りうちに川路十里あまり下りて、下中条村に宿りぬ。かの樋口に入砂とむることは、ひるよるわかず水かへなどしつ造るに、水増りて川の表をかりに築きりたる堤たびた水もりて、つゐにをし切られにければ、またそのと(外)の方も萱もて埋つきとめたれど、水かへはすことにのみをはれて、いまだつくりはたさず。是より見沼井筋の埋りたる所を深うし、あるは

はたを切ひらきなどしたるをみつつ行。埼玉村と云ところは古き世は船津にて、利根川より今の星川忍川など云川々つづきて、此埼玉の沼にかよひけむ。「津による船の風をいたみ」とも云、又「埼玉のおきの沼に鴨ぞはねきる」などいひけむ、いとひろきみぬまなりしが、いつの頃よりかあせにけむ、船もかよはずなりて、享保の頃より田かへすところとなりけり。此ほとりばかり沼のおほかる所はまれなり。埼玉沼、見沼、屋巢沼、高沼、黒沼、笠原沼、これらの外にも猶小沼有。みな田になりて名のみ残れり。いとかみつ世はひとつ沼なりけんもしられず。

埼玉のおききの沼の津はあせにけりいづしかも田をこそつくれ船はつぐらず

むかしなつかしう何くれと尋ねれば、「ここに若わうじと云所に、ひろき二尋余りの石のひつぎめくもの堀出せり。手ふれるものはたたり有とて恐れちかづかず」と云。いとふるき世の高き人の、をくつきどころにや有けむ。丸墓てふ名つきたる大なる塚も有と云。又、埼玉山盛徳寺てふ古寺有。大同の頃の草創にて、今もそのころの瓦有。埼玉の神社とまへしもここに有しとぞ。今「富士山」と云て、「浅間の社を建置ところ也」と云伝ふ。みなふるき名のみ残り、「何事もふるきはしたはしきに、人こそうとまれ行ものなれ」とて、わびしかる。藪にかかりたる藤の花を折て、

藤のはなながざして行む紫のはつ元結と人のみるがに

「白藤ならば老の浪とやいはれむ」とてわらふ。綾瀬川をわたるとて、船よする浪の綾瀬のみなれ棹みなれし花の俤にたつ

大門宿と云ところに宿りて竹嶋、柳崎、芝村など云わたりを行。こはかの見沼代用水の西べりのかた也。門野と云ところに至るに、「富士のかたしたる山有」とききて行てみれば、いとおかしくつくりなしたる山

にて、したは東べりの流有。千町の小田をうちこして西べりの流もそこなめりと見ゆるに、その岡山のすそに秩父山、ただ手にとる斗みえて、はるかに富士浅間などもつらなりたるやうにみゆ。桜あまた植たるに、はやちりはてて、つじ藤などにほひたり。そのはじめ、いかなることにて、かかる片田舎にかくはつくりなしけむ。「今は人のあつまるところとなりて年毎に桜など植」と云。

雪とのみ花ちりひち年つもり武蔵のうらの富士となりけむ

(28) 村長の先祖

廿四日。雨そぼふるに、藤宿よりむまやつたひに鴻の巣の宿につきてやどる。明れば、そらはれわたりて風すこしふく。「又荒川のかたへ」とて、かのぬる田にいたりて老ぬる声（うぐいすの成長した鳴き声）もきかむと思ふに、なかずなりにけり。江川、久下、大芦など云わたり、千鳥がけに（たがいちがいに）みありく。小泉と云所の民の家の前をきよらに流る水に、かきつばたの咲たるをみて、

風ふけどちることしらぬ杜若水の心の春ぞのどけき

古名と云所の村長が家にやどる。庭の、こ高くしげりたるもとに、ふるき碑有。是をみれば、「此遠つ親なりける人は秋庭備中守藤原重とて代々足利家につかへしが、義晴朝臣のとき古河の城にてうたれける」となむ。「其子新左衛門元矩と云もの、ひそかにのがれ来て爰に荒野をうち返し田につくりなして古名、丸貫、埜口、みつの村にひらきつ」と云ことをしるせり。げに民どもの中にもかかるたぐひのことおほかめれど、まめにつつまじうのみのすれば、とへどもかたらず、人しれぬ事にのみなりもて行ば、はてはてはその家にその氏をさへうしなひぬるも

あらんか。

つごもりにもなりぬ。川越より入間、川扇、まち屋、箱根が崎を過て、又玉川にいたる。「此ひと流を見ればふるさとかへるなるべし。今いくか」とひとびと、をゆび折などすめり。「かへりつかむには、そのことかのこと、かうかうなん」など云やるとて、

鶯の花のやどりも旅はうしただふるさとの春をのみこそ

卯月になりぬ。やつれたりし旅の衣の、はた花染にしもなき、いとかけやすうてたちいつる。「宿りも、はやふつか三日なり」とていそぐ。はつ草のはつかなりしほどにわけそめしが、結べきほどにこそなりにけれ。「ましば折たきし日はかうなむありし。霜ふみわけし朝風は」などいひ出るも、はや跡のことになん過ぬるかし。

紫の根ずりのころも春過て夏立帰るむさし野の原

乍序申入候。

一 先達而の「川めぐりの日記」漸自写を遂候故返上候。校合等かれこれ延引、扱々恐入候。

右日記扱々感心仕候。詞といひ御詠といひ実の実意、さらに詞をかふべきやうなく候。実にかんじ仕候。これは後代にのこされ急度貴兄の日記とて御名ものこされ候日記にて御清書にても候はば可然候。若は清書も候はば乍失礼奥書にても可任候。呉々感心事候。

但此中「奏する」と申事有是候。是は天子の外には「奏」と云事は無之法礼に候得ば何とぞ不苦候は「申」に御かへ可然候。其外一言無申事、感心仕候。さてさて面白御こと風土記共可申処に有之候。自写長く相伝可秘藏候。

一 御百首返上候。

以朱申入候通、亦各可申事無之候。「暁」の御詠なるほど是は仰の通、此御詠におゐては臥拍当此外ことのあるまじく御同意に候。しかし先〇は御おくに付置候。これは未伝之憚也。御歌がらもよろしく何とぞはしの方に印付度候得共、何分も何分も憚候事故乍□□如斯候。

日野大納言資矩

藏田堯民(花押)

追記

なお、この「川めぐり日記」について要約紹介した板坂論文『川めぐり日記』を読む(ペリカン社刊『江戸の旅を読む』所収)をホームページに紹介していたところ、霞ヶ浦関係のお仕事をされている中村誠氏から赤堀川の工事の時期についての詳細なご指摘をいただき、この日記の制作は文化六年(一八〇九)ではないかとのご推測を示していただいた。その後、『江戸の旅を読む』刊行後、やはりホームページに横浜市在住の飯塚玲子氏から、神奈川県立金沢文庫発行の『金沢文庫研究』94・95・96号に熊原政男氏「金沢氏の後裔」、1000・1005号に小松原清氏「遠国奉行金沢大蔵少輔千秋」、190・191号に樋口秀雄氏「金沢千秋と『越の山つと』(一)」「越の山つと 地の巻」の論考があり、それらを見ると、この「日記」は文化五・六年のことを記述したものであるとのご指摘をいただいた。

中村氏からも更に新しい資料の情報をいただいている。

これらのご指摘からも、この紀行の成立は文化六年としてよいであろう。私の調査の不備をお詫びするとともに、お二人に深く感謝したい。なお今後、この紀行の背景についての調査をして行きたいと考えている。